

[わたしと美術館]

和紙について

ロバート・シンガー

去年の六月末、島根県の八雲村で行われた第六回手漉(す)き和紙青年の集いに参加した。十年前から和紙に深い興味をもっていた私にとってこの集まりは大変勉強になった。二日間、五十人ほどの紙漉きさんの討論や意見を聞いてこれからの世の中で和紙が残るかどうかという問題を真剣に考えた。四年前から、私は、和紙のオーソリティである森田和紙専務森田康敬さんのお世話で、ほうぼうの手漉き場を見学させてもらい、和紙についていろいろと教えてもらっているが、こういう集まりに参加するのは初めてだった。

まず話題となったのは質の問題であった。和紙というのは日本独特の原料である楮(こうぞ)、三桠(みつまた)、雁皮(がんぴ)などの鞣皮(じんぴ)繊維から作られた紙である。百パーセントこの原料でできていなければ本当は和紙とは言えない。しかし残念ながら、こういう良質の原料がだんだん高くなってきたため、手で漉いた紙であっても木のパルプが入っている紙が多くなっているのが現

状である。私が時折りいただく「和紙風」の名刺や便箋はほとんどがパルプものである。まがいものには鞣皮繊維の紙がもっているすばらしい光沢がない。そして、逆に考えている人が多いのだが、あまり長く保存できない。千二百年あまりもよい保存状態で残っている正倉院の手漉き紙を考えて欲しい。百パーセント楮や三桠や雁皮が原料の紙は当然値段は高くなる。しかし、いい紙であれば売れるはずである。明治以後の日本の紙漉きさんのとった方針は値段をなるべくおさえるために悪い原料を使う方に走った。和紙というものは機械すき紙とまったく違うものと考えた上で、その保存のためには、値段をある程度外視することも必要だったのではないかと、たいへん手間のかかる技巧を用いるのだから、できるかぎり最高の原料を使わなければ意味はないと思う。

以上の質と原料の問題は基本的には本物を尊ぶ心と知識の問題だと思ふ。今日の日本人は、和紙のよさを理解できなくなっているか



ら、いい紙とよくない紙の区別ができない。買い手の知識が高ければ高いほど、日本の紙の質はさらに高くなるはずである。紙漉きさんが純粹の原料を使わなければ、買う人たちは信用しなくなる。買う人たちが最高の紙を要求しなければ紙の質がおちることにもなる。

たとえば、表具は最高の紙を必要とする。この間、古美術屋さんで最近新しく表具されたものを見た時に、それがすばらしい紙を使った紙表具だったので感心した。その店の主人のいうところでは、その紙は大正時代にアメリカのボストン美術館の東洋絵画修理所へ行った和紙で、アメリカの知人が送ってくれたもので、こんなにいい紙は今の日本にはないということであった。その通りだと思う。表具の場合、紙の質はいうまでもなく特に大切である。うら地の紙は変色したり、硬くなったりして、保存がとてむずかしくなる。今まで、アメリカの「表具師」は西洋の紙に書いたデッサンや版画の保存の為にメンディング・ティッシュ(修理用のうすがみ)として日本の紙をよく使っていたそうだ。日本の紙は軽くて薄くて、強靱でちょうどいいという評判を持っていた。しかし、アメリカではさらに良質の紙を欲する傾向があるのに対し、日本の紙の中には次第に色々な不純なものが入って来た。今では和紙の材質を保証することができないので、アメリカでは使われなくなりつつあるという現象があるそうだ。良質の信用ができる紙をという要求に対して、日本で

熱心に紙漉を勉強したティモシー・バレット氏は現在アメリカで一所懸命に質がよく、薄い日本の和紙にちかいかものを作っている。昨日、そのアメリカで漉いた紙を送ってもらったが、実にいい紙である。

紙の質に立ち入ると本当に際限がない。原料の他にも色々な要素がある。鞣皮を煮る時、本当は木灰を使わないといけないのが、今はソーダ灰がほとんどである。また、できあがった紙を乾かすとき乾燥機を使うのと、板干しでは墨つきの具合が全然違うと書道家はいつている。

また同じ原料だが、フィリピンの雁皮は安いから、最近、日本でよく使われているそうだ。しかし、熱帯地では、生長が早いので、日本の雁皮ほど繊細ではないという。純粹に考えれば、日本産の原料でないと、和紙とはいえない。

私は和紙を作るわけではなく、いい紙を使いたいというだけなのだが、しかし、それを手に入れるのが非常に難しくなっている。残念ながら、京都の一流文房具屋さんにもいい和紙はおいていない。ほとんどニセモノの和紙である。これは大変なことだと思う。一所懸命がんばっている紙漉きさんのいい紙はごく小さな手作りの店ではか買えない。

日本では手漉き紙の伝統が途絶えようとしているが、アメリカでは逆の傾向が見られる。原料と漉き方は和紙とはまったく違うけれど、十年ほど前から本職として手漉き紙を作る若い人がふえてきた。千数百年の歴史をもつ日本の手漉き和紙の伝統をどうか大切にしたいのである。(『京都新聞』昭和55年10月8日掲載の「和紙」に加筆。'81-2-5)

[ロバート・シンガー氏略歴]

1947年2月3日、アメリカ、ニューヨークに生まれる。1972年、プリンストン大学大学院修士課程(日本美術史専攻)修了。現在、プリンストン大学博士候補で、京都大学研修員として来日。専攻は桃山時代の障屏画で、特に海北友松について研究されている。京都市在住。

楮の皮剥ぎ(吉野・国栖 入江泰吉氏撮影)



紙漉き(美濃 塚原周氏撮影)

